

名無しの妖怪

川村元紀

明けない夜の下に、鬱蒼とした森林が広がっている。森の中には月明かりも届かず、手探りで進んでいかなければいけない。じめじめとした空気は暖かいとも言えず、自分の身体の境界線もどこかわからない。手に触れるものは苔やきのこ、虫やらで、心地よいものではないが、生命にあふれていることは伝わってくる。

時折は人の気配もするようだ。特に言葉を交わしたりはしないが、お互いの位置を確認してすれ違う。どちらもどこに向かうとも知れず、ただ地面の上でもがいているだけにも見え、しかしその動きを止めることはなく。それでいて、心はあちこちに激しく移り変わる。不安と期待、焦燥と安堵、そのどれもが、その瞬間には真実に見え、その直後に欺瞞に見えてくるのだ。

この森には妖怪が出るのだという。名前のない妖怪で、不気味な声で鳴く。黒い霧のようなものに包まれており、よく姿がわからない。その不吉な声を聞いていると、気持ちが落ち込み、果てには病気になったりすると言われている。その正体は大きな鳥であるとか、あるいは虎のような体に蛇の尾がついているとか、得体の知れないあやふやな話がされている。名前もなく、姿もわからない、その不明さがますます不安を掻き立てるのだった。

森の両端には高台があり、この森を一望できるようになっている。列を成して、そこへ上っていく人たちがいる。高台の上には電気が引いてあり、明かりがともっている。輪郭がはっきり見え、人と人との間には境界線が引かれ、安堵した人たちが森を眺めている。そこに不気味な妖怪の声が響く。そして高台の人々はこの妖怪に名前をつけたのだった。

名前をつけるということは、輪郭線を引くことである。その名前を使えば使うほど、輪郭線ははっきりとする。名がつけられることで、あいまいで中庸な領域は排除され、往来は認められず、程度の差は無視されるようになる。姿のはっきりした妖怪はもはや恐るべき存在ではない。

私は木の根に腰を降ろし、足を休めることにした。遠くで不気味な鳴き声がする。足元には、蟻が列を成して食料を運んでいる。せわしなく蠢くその黒い線は、まるでそれ自体がひとつの意思を形作っているように感じさせる。いや、本当にひとつの意思を共有しているのだとしたら。あるいは、人もまた、共有された意思のもとで操られているに過ぎないとしたら。はるか上空から地球を眺めたら、人間もそう見えるのではないか。それを否定したいがために、私はここで一人でもがいているのではないか。

妄想に翻弄されながらも、私はどこかこの状況を肯定したいような気分になる。寄る辺もなく、何も持たず、手足で何かを感じ、一喜一憂し、私は、私自身を堪能している、そういう気分になるのだった。